

## 朝礼 校長講話（12月19日）

今日は、昨日の夜のテレビの話題からお話をしたいと思います。

それはサッカーの試合と大河ドラマ「真田丸」です。ちょうど同じ時間帯でしたので、どちらを観ようか迷った人もいるかもしれませんが、その二つには共通することがあるという話です。

サッカーの試合はクラブチームの世界一を決める「クラブチームW杯」の決勝戦でした。日本代表のように選抜されたメンバーではなく、日ごろ日本で言えばJリーグなどで戦っているクラブチームが世界中にあります。そして、昨日の大会は、それぞれの国で一番になったチームが集まって世界一を決める大会です。この大会は数年前までは「トヨタカップ」と言って、ヨーロッパのNo.1と、南米のNo.1が戦って世界一を決めていました。つまり、他の地域は出場していなかったのです。どうしてかということ、歴史のあるヨーロッパとブラジルを中心とする南米のサッカーのレベルが飛び抜けていたからで、そこに他の地域のチームが出場しても勝てないという理由だったそうです。しかし、年々世界各地のサッカーのレベルが上がり、今のように各地域でNo.1になったチームが出場する大会へと変わりました。その大会の決勝戦に、日本のJリーグチャンピオン鹿島アントラーズが出場し、ヨーロッパ代表のレアル・マドリードと優勝をかけて戦いました。結果は惜しくも負けてしまいましたが、その戦いぶりや実力が世界中を驚かせています。

しかし、日本のサッカーのレベルがここまでになるまでには長い年月がかかりました。そして、その歴史をたどっていくと一人の人物にたどりつきます。三浦知良選手です。現役最年長の選手として今も活躍してみえますが、彼は、中学3年生の時、ちょうど3年生のみなさんが今まさにそうであるように、進路希望調査があったときに、その用紙に、進路先として「ブラジル」と書いたそうです。担任の先生からはふざけるなと叱られたそうですが、三浦選手は真剣にそう考えていました。静岡の高校に進学しましたが、数ヶ月で辞め、ブラジルへ渡りサッカーを学びました。しかし、当時のブラジルには「ジャポネーゼ」という言葉がありました。これは「日本人」を表す言葉ですが、もう一つ「サッカーが下手な奴」という意味もあったそうです。それくらい、日本人や東洋人、アジア地域のサッカーのレベルは低かったようです。しかし、そんな中でも三浦選手はあきらめずに練習を続け、すばらしい選手となり、その技術を日本にも広げてくれました。昨日の決勝戦に日本のチームが出場できたのも、三浦選

手のあきらめない気持ちがあったからだと思います。

そして、その「あきらめない気持ち」が、昨日、最終回を迎えた「真田丸」の主人公、真田幸村にも通じます。

真田幸村は戦国時代最後の武将で、織田・豊臣・徳川と続いた天下統一の時代を生きた人物です。活躍したのは、授業でも出てきたと思いますが、「大坂冬の陣・夏の陣」です。豊臣方についていた真田幸村でしたが、相手の徳川方の方が圧倒的に数も多く不利な状況でした。しかし、真田幸村は「あきらめない気持ちを持つ者が勝つ」と言い続け、結果的には敗れてしまいましたが、一時は徳川勢に迫る戦いをしました。

皆さんにはさまざまな目標があります。そして、その目標に進もうとした時に、いくつもの壁に当たることがあります。時間的な壁、力の壁などさまざまな壁があり、あきらめてしまうこともあったと思います。しかし、そこを乗り越えることで、夢に一步近づき、実現できるかもしれません。二人の人物から、そんなことを学んでほしいと思い、お話ししました。